

国際協力特別賞

「学ぶこと、知ること、考えること」

同志社女子高等学校 1年

中井 日向子

私はこの夏休みにセブ島へ語学留学をした。単独で海外へ行くのは初めてで期待と不安が入り混じっていた。空港でガールスカウトの集団を見かけた。昔、私が所属していた時に、リーダーがボランティア活動の為、海外へ行っていた事を思い出した。私はセブ島までの飛行時間、あちらでの週末の過ごし方を考えるきっかけになった。セブ島での一日は忙しくて充実して、勉強しにきて良かったと思う日々で、週末まであっという間だった。授業の無い週末は、飛行中考えていた事…孤児院でボランティア活動を行うことにした。私が留学した先はセブ島の医科大学で附属寮に宿泊していた。十五歳の私は単独では大学から外出許可が出ない。だから同じく留学に来ていた元トビタテ生で、「発展途上国にどのような支援が必要か」を勉強している高校生と一緒にに行くことにした。この時、初めて市内に出かけたが、セブ島の知識が「綺麗な青い海」くらいで、驚きの連続となった。

車で移動して孤児院に行く道中、日本では嗅いだことがないような臭いがした。市内とはいえ、日本とあまりにも違う町並みで、「戦後ってこんな感じ？」と思った。大学から出ただけの景色の変化に、留学説明会で「大学近辺は裕福層の人々が住んでいて、比較的安全」と説明された事を思い出した。驚きまくる私に、元トビタテ生が「知らなさすぎ」と言った。孤児院に着き、子供達と一緒に遊んだり、話したりして過ごした。皆、本当に人懐っこくて、素直で、可愛く甘えてきたり、構ってほしくていたずらしてきたり、私の想像していた孤児院とは全く違った。何かに不自由しているようには見えない上に、語学が堪能で日本語で会話してきた。「ボランティア必要？」とさえ思った。セブ島の孤児院の行き届いた環境に、良い意味で驚かされて寮に帰った。

週明け、感想を先生方に話したら、私が見たのはほんの一部だった。まず、臭い。あの原因は、ゴミの山の為だった。フィリピンではダイオキシンが発生するプラスチックを燃やすことは禁止だ。政府が管理しているゴミ集積所は少なく、個人の土地を借りて集積所にしている。すると、その土地の住人は行くところがないので、ゴミ集積所となったその場所に住む。劣悪な環境でもそこに住むのは仕事があるから。「仕事」とは、ゴミ山からお金になるものを拾ってきて売る「スカンベンジャー」となること。フィリピンの貧困層の人には大切な収入源だ。そこで子供達もゴミを拾って働いていると聞き、ではあの不自由なさそうに暮らしている孤児院の子供達は何だろうと不思議に思った。そこでもっと驚くことを聞いた。本当に支援が必要な子は親と暮らす。孤児院に入れられるのは将来性のある子供で、裕福な里親が面倒を見る。衣食住に困ることはなく、学費も出してもらえる。だから、将来の為に語学の勉強もできるから、日本語が堪能なのだと。私は何もわかっていなかった。孤児院でボランティア活動した事は、これらを知るきっかけとなったので、無駄ではなかったが、本当に支援が足りていないのは別にあると思った。そして、「支援」とは何だろう？とずっと考えている。「支援」とは、相手が必要だから意味があるのであって、押し付けであってはならない。相手の状況は？無知なままでは「支援」にならない。私はこの夏、語学の勉強をしにセブ島

にきた。だが自分の無知さも気付かされ恥ずかしく思った。以前ある人に、「皆が教育を受けられない世の中で、いかに自分が恵まれているか、学んだことを社会に還元する義務がある」と言われたことが頭の中でグルグル回った。世界の問題について他人事にならない人間になる為に学ぶのだ。今の私が出来ることは小さな事、「学ぶこと」「知ること」「考えること」…でも、社会に還元できる人間になる為の「一歩」と信じている。